

ガーナにルーツを持つ私のこれまで

My journey so far, rooted in Ghana

山田 平／Yamada Taira

私は、日本人の母とガーナ人の父のもと、日本で生まれ育ちました。幼少期のおぼろげな記憶をたどると、私は自分に「ガーナのルーツ」があることを、幼いながらもはっきりと意識していたように思います。それはきっと、当時、父と過ごす時間がとても多かったからでしょう。

まだ小さかった頃、休日になると父は私を車に乗せ、さまざまな場所へ連れて行きました。行き先は友人の家、床屋など、ガーナ人やアフリカ出身者が多く集まる場所ばかり。そこで父は友人たちと談笑したり食事を楽しんだりし、車にはその場で出会った人を乗せ、また次の場所へ向かう——そんなせわしない光景を今でも思い出します。

家では、父がいつも友人や親戚に電話をし、どこか落ち着きのない雰囲気ラジオを流していました。日曜日に必ず作り置きしていたスープの香り、日本ではまず見かけない不思議な物が家に置かれている様子。そうした日々の中で、私は住んだこともないもう一つの故郷を自然と感じ取っていきました。

そして、小学1年生の夏休みに、初めてガーナを訪れました。日本からドバイを経由し、首都アクラに到着。そこから車に揺られること約1日半、辿り着いたのは父が生まれ育った家でした。父の親戚や友人たちは皆、私を温かく迎えてくれました。振り返れば、その時に会えることができた、今は亡き祖母と祖父の姿は、かけがえのない記憶となっています。

声をあげる大切さ

10代という多感な時期を迎えると、私は少しずつ生きづらさを感じるようになりました。進学やアルバイトを始め、周囲の環境や人間関係が変化する中で、容姿も家庭環境も周囲と異なる私は、常に目立つ存在でした。それが良い方向に働くこともありました。何もしていなくても人が自然と集まってくることは、確かにありがたいものでした。

しかし、当然ながら嫌な経験も少なくありませんでした。数ある出来事のうちの一つですが、初めてのアルバイト先で領収書の宛名を書いていた際、客か

ら「お、漢字書けんの!？」と言われたことを今でも覚えています。その時、自分がどう返したのか正確には覚えていませんが、きっと曖昧に流してしまったのでしょう。それでも記憶に残っているのは、「言い返せなかった」という事実と、そのことがとても悔しかったという感情です。

それ以外にも、自分がからかわれたり、理不尽な扱いを受けたりしたとき、場の空気を読んで曖昧に笑ってやり過ごしてしまう自分が嫌でした。時には、自分という存在だけでなく、親までも裏切ってしまったような感覚すらありました。

そんな中、大学入学直後、私はふとマルコム X の伝記を手に取りました。理由は明確ではなく、国際学部に入ったのだから何か国際的な人物について知ってみよう、教科書にキング牧師と並んで名前が載っていたけれど、どんな人物なのかよく知らない——その程度の動機でした。

そこで初めて出会ったマルコム X。1950～1960年代のアメリカで、制度上は奴隷制が廃止されながらも深い差別に苦しむアフリカ系アメリカ人を啓蒙し、立ち上がらせた公民権運動の中心人物。その活動は評価が割れる部分もありますが、私にとってはまさに青天の霹靂でした。自らの存在やルーツに誇りを持つことを説くマルコム X のメッセージは、それまで曖昧だった自分のあり方に大きな影響を与えました。

この経験を機に私は、嫌なことや理不尽な扱いを受けた時、できる限り言葉で反論するようになりました。もちろん、暴力に訴えることは許されませんが、相手の立場に関係なく、言うべきことを口にするのを心がけています。私たちのような存在だからこそ、自分を守る術を知り、声をあげる必要があるのではないのでしょうか。言われっぱなし、やられっぱなしでは、何も変わらないと強く思うようになりました。

アメリカで得た学び

自分自身と深く向き合い、多くの学びを得た経験として最も大きかったのは、大学在籍時のアメリカ留学でした。カリフォルニア州サンフランシスコで10カ月

山田 平（やまだ たいら）：2000年生まれ、ガーナ人の父と日本人の母の間に東京都板橋区で生まれ育つ。2025年3月に明治学院大学大学院修士課程を修了。修士論文では、埼玉県川口市にある在日ガーナ人が集うキリスト教会について執筆。大学院在籍時にアフリカ日本協議会にボランティアとして携わるようになり、主にアフリカンキッズクラブを担当している。

間、交換留学生として大学に通いました。海外へ「旅行」することは何度もありましたが、「住む」という経験はこれが初めてでした。アメリカの中でも特に多様性を重んじるサンフランシスコでの生活は毎日が刺激的で、私の価値観をこれまで以上に揺さぶる出来事に多く出会いました。

書ききれないほどの経験の中で、一つ挙げるとすれば、今でも親交のある友人との出会いです。彼はロサンゼルスで生まれ育ち、私と同年で、同じくガーナにルーツを持っています。大学のイベントでたまたま隣になったことをきっかけに、自分と同じ背景を持ちながら日本で生まれ育った私に興味を抱き、そこから親しくなっていきました。

私は彼に、日本で経験した差別的な出来事を話すことが度々ありました。そのたび彼は、「お前は本当にすごいよ。自分だったら、そんな環境で生きていくなんて考えられない」と労ってくれました。自分にとっては「日常の中で起こる出来事」であり、ただ自分なりに対処してただけでした。しかし、それが別の国に暮らす人にとって尊敬に値することだと知り、どこか救われたような気持ちになりました。

さらに彼は、アメリカで生きていくうえでの大切な感覚も教えてくれました。ある日、私が黒いパーカーのフードを被って歩いていた時、彼は「被らないほうがいい」と忠告しました。私が「これは自分のスタイルだから」と返すと、彼は「トレイボン マーティンはそれで殺されたんだぞ」と言いました。

黒いフードを被って入店し、万引き犯と誤解されたことで撃たれ、17歳で命を奪われたトレイボン マーティン。アメリカでの生活を何気なく楽しんでいた私は、自分の容姿や肌の色が、アメリカ社会の中では時に「脅威」として認識されるという現実を、この時初めて突きつけられました。

「ガーナ」との再会

大学4年次に帰国した私は、そのまま大学院の修士課程へと進学しました。そこで取り組んだテーマは「在日ガーナ人」に関する研究でした。学部時代はアメリカの文化や社会について主に学んでいましたが、研究対象を大きく転換する決断をしたのは、やはり留学中の経験が大きなきっかけとなっています。

サンフランシスコで暮らす中で、多様な人々がそれぞれのルーツをもとにしたコミュニティに属しながら生活している光景を、私は心から羨ましく思っていました。そこでふと、幼い頃に父がガーナ人の集う場所へ私をよく連れて行っていたことを思い出しました。歳を重ね、自立する過程で疎遠になっていましたが、私には確かに「訪れ、関わることのできる人々」がいたのだと改めて気付かされた瞬間でもありました。

そこから私は、日本に暮らすガーナ人がどのように生活し、何をコミュニティとしているのかに強い興味



を抱くようになり、それを修士論文のテーマに据えることに決めました。

実際の調査では、埼玉県川口市にあるガーナ人によって設立されたキリスト教会に毎週のように通い、参加者や関係者の方々と親交を深めながらフィールドワークを進めました。こうして地道に調査を重ね、2025年3月になんとか修士論文を提出し、課程を修了することができました。

中でも特に印象に残っているのは、初めて調査を兼ねてその教会を訪れた日の出来事です。勝手が分からず戸惑いながら歩いていた私は、周囲の人々から不思議そうな視線を向けられていました。ようやく席につき、近くにいた方へ自己紹介を兼ねて父の名前を伝え、その方の表情が一変し、「本当に？」と驚きつつ、すぐに誰かへ電話をかけ始めました。その相手は、なんと私の父でした。

その方は父の友人であり、私が幼い頃に何度も会っていた人でした。すっかり大人になった私を見て、「大きくなったね」と懐かしそうに言ってくれました。その瞬間、私は「ああ、自分は確かにガーナを抱えて生きているのだ」と深く実感しました。今も鮮明に記憶に残る出来事です。

結び

断片的に見えるこれらの出来事です、振り返ると一貫している点があります。それは、私に「ガーナ」というルーツがなければ、決して起こり得なかったということです。自分でも驚くほど稀有で、予想のつかない道のりを歩いてきたのだと感じます。今では友人とともに、ガーナを訪れて私を主人公にしたドキュメンタリーを作ろうという計画まで立ち上がっています。自分のルーツに向き合い、それを記録として残す試みができることに、不思議な縁と感謝を覚えます。

これから先も、ガーナというルーツが私にどんな景色や出会いをもたらしてくれるのか、強いワクワクを感じています。ガーナと共に歩んでいく自身の人生が楽しみでなりません。